

蛭谷を再び和紙産地に

伝承協議会設立 担い手を育成へ

「蛭谷和紙」の産地だった朝日町蛭谷地区の住民有志らが十五日、和紙産地の復活に向けて伝承協議会を設立した。現在、地区内に和紙をすける人がほとんどいないことから、担い手を育成し、和紙を再び出荷することを目指す。

山あいの蛭谷地区は、和紙の原料となるコウゾの産地だったことや、和紙をすくためのきれいな水が豊富だったことから、産地として発展。昭和初期には、主に冬場の内職として数十戸が和紙をすいていた。

しかし、戦後、働きに出る人らが増え、担い手が減少。現在は、地元で自然体験教室「夢創塾」を主宰する長崎喜一さん(モモ)が、受講生に紙すきを教えているだけで、職業として和紙をすく人はいない。

蛭谷自治会館で開いた伝承協議



「蛭谷和紙」の産地復活を目指して設立した伝承協議会の発足会＝朝日町蛭谷で

会の発足会には、地元住民ら十五人が出席。会長に長崎さんを選んだ。年配の住民の多くが若いころ、家で和紙をすいた経験があることから、今後、講習会を開いて住民に昔覚えた感覚を取り戻してもらおうほか、自治会館内の工房ですいた和紙のがきや名刺などの出荷を目指す。

長崎さんは「技術の習得には三年ぐらいかかるだろうが、担い手を育て、魅力ある和紙を生産したい」と話している。(伊東浩一)